

「いいだ未来デザイン 2028」平成 29 年度戦略計画についての意見交換の内容

いいだ未来デザイン会議委員からのご意見・ご提案	ご意見・ご提案に対する回答
<p><基本目標1 若者が帰ってこられる産業をつくる></p> <p>【石神委員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若者が何を求めるのか、これをしっかり把握し理解することが大事。 ・航空機産業など頂上をさらに上げていこうとしているが、これは飯田らしさという特徴をさらに伸ばすということで大変重要である。しかし、裾野を上げるということも大事と感じる。 ・雇用の吸収力を大きくする、バラエティーを増やす、という考えが必要である。 ・個人の論理をしっかり把握することがまず必要。 <p>【木田委員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飯田でデザインと聞くとピンとこないが、「市田柿」とか「人形劇」、「航空産業」と言われると、取り組んで来た歴史があり、それに興味がある人であれば、ここでならやる意味があり選択肢になると思える。ここでなら、自分でやりたい分野で一番いい体験ができるという確信が持てるような提案ができればと考える。例えば、飯田に来れば航空産業については、東大や都会の大学に行かなくても、もっと勉強ができるとか、いい仕事に就けるとかそういう事が分かってくると、飯田に行く意味があるのではないかと感じている。 ・新しいものを創ったりするよりも、皆さんが知らないうちに昔から続いている大事にしてきたものを、もっとしっかりアピールすることで、地味で目立ちにくいかもしれないが、そこに魅力が広がりとても大切なことと感じる。 <p>【宮原委員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本目標評価シート 3 ページの進捗状況確認指標「学卒者の地域内回帰率・定着率」について確認したい。 <p>・若者が帰ってこられるというテーマなので、元々ここにいる人がどれくらい就</p>	<p>【遠山産業経済部長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「なぜ、帰ってきたのか」というデータは取れるが、「なぜ、帰ってこないのか」というデータをどのようにして把握するのか悩んでいる。様々な手法で情報を取っていきたいと考えている。 ・トータルコストを考えた時、都会で一生暮らすのと、田舎で暮らすのと考え方が異なるが、便利不便のある中で、仕事だけではなく、暮らしや精神的な部分などトータル的に若者にどう伝えていったら良いのか、一緒に考えただけならと思う。 ・若者の考えを早く正確に捉えていく必要があると考えている。 <p>【遠山産業経済部長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飯田に行けばこれがあるというものを明確にし、情報発信していくことが重要と考える ・航空機産業もそうであるが、今までの様々な取組を活かし大事にしてきた事をさらに磨き上げていくことが重要であると認識している。 <p>【遠山産業経済部長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分母は、飯田下伊那地域の高校卒業者の数である。飯田下伊那の高校を卒業して、そのまま地域に就職した人は分子に入っている。また、大学や専門学校に行って戻ってきた人も含まれているが、分母はあくまでその年に高校を卒業した人となっている。 <p>・ハローワーク及び企業と連携してデータを取っている。例えば 2017 年は高卒</p>

職するというよりも、一端この地を離れた若者が帰ってこられるかどうか、そこに絞ったデータはあるか。

- ・大卒の 20.4%は、長野県全体からすると、約半分程度である。長野県内の学校を出て、一端外へ出て人が大学等卒業し県内に就職する割合が 40%前後なので単純に比較すれば 20%というのは低い数値といえる。

飯田下伊那に帰ってくるという考え方をもっと広げて、飯田下伊那出身者が長野県内に帰ってくる。そういうような考え方も入れてはどうかと思う。県内にいけば、実家にもすぐ帰れる。そういう考え方もあるのではないか。

<基本目標 2 飯田市への人の流れをつくる>

【永井委員】

- ・移住相談会に出ていると書いてあるが、実際に相談があった中で結びついた比率はどれくらいか。

【外松委員】

- ・20 地区で実施している田舎へ還ろう戦略は、各地区ですでに動き出しているのか、それぞれが動き出そうと検討しているのかそこら辺はどうなっているか。

で就職した人が 352 人。大卒で戻ってきた人が 329 人。全体で 700 人程であるが、その中で高卒が 20.6%、大卒が 20.4%となっている。

【遠山産業経済部長】

- ・(補足説明) 基本目標評価シートの 8 ページの総合戦略における重要業績評価指標の体験プログラム年間参加者数について、2015 年が 36,000 人、2016 年が 48,800 人、2017 年が 36,500 人となっている。これも一つの要因だと思われるが、熊本県の体験教育旅行が有名であるが、2016 年の熊本地震の影響で熊本県に行けなくなった方々が飯田市に来ていたと分析できる。しかし、そのまま飯田市に留まらず 2017 年には、また減少してしまい繋ぎとめておくことができず反省するところである。2015 年と 2017 年を比較していただくと体験教育旅行の人数は比較的安定しているといえる。

【遠山産業経済部長】

- ・データ集の 14 ページ。2016 年 190 人、2017 年 255 人。田舎へ還ろう戦略が動き出したこともあり、就労ばかりではなく豊かな暮らしを求める移住定住も踏まえ、だんだんと増えてきている。実績は上がってきていると捉えていただいて結構。

【企画課】

- ・20 地区足並みを揃えて取り組むというのは困難。各地区に応じて進み具合は違っており、ある地区では地域の方々が何をターゲットにどんな内容でと検討している地区もあれば、まずはその地区の自治振興センターの職員がある程度地域内の課題を把握し、どんな内容で地域の方々と検討していくかなど、それぞれの進捗具合となっている。

- ・それは、先ほど言っていた、産業振興課のキャリアデザイン室や地区との連携が図られているのか。

【石神委員】

- ・ここは2つに分けて考えなくてはいけないと思う。移住定住（UI ターン）と観光的なものが入っている。質が違うので一緒になってしまうのはどうか。
- ・休日滞在人口率というのがあるが、隣町からスーパーに来てカウンスされるし、隣村から仕事に来ていてもカウンスされる。このデータの使い方は非常に難しい。もっと踏みこんだ分析ができると良いが。
- ・先ほどインバウンドの話があったが、インバウンドの客はどこから来ているのか。

【永井委員】

- ・人形劇世界フェスが 10 日間あったが、インバウンドについてはまったく関係がなかったように思える。
- ・せっかく飯田市の宝ともいえる人形劇が、10 年後には 50 周年を迎え、リニアが開通する時代。このユニークな取組を日本の人も含めてもっと知らせたいし、知ってほしい。それには、上田市だって大河ドラマを呼ぶのに、20 年みんなで運動してやっと実現した。飯田は「朝ドラ」を狙ったらどうかと思う。とても効果があると思う。市も何か考え、発信するだけでも一つの流れが出来てきて、例え実現しなくてもそういうものがある、ということ世に発信できたらと思う。

<基本目標3 地育力が支える学びあいで、生きる力をもち、心豊かな人材を育む>

【木田委員】

- ・データ集の学力の状況について。詳細をお聞きする。

【遠山産業経済部長】

- ・今、移住を考える時、暮らし、仕事、教育、子育て福祉など様々なことを考えるので、キャリアデザイン室、ふるさと定住支援課、地区と市内連携しながら取り組んでいる。教育の視点であれば、もちろん教育委員会も連携して取り組んでいる。

- ・より客観的に分析できるデータについて、引き続き検討していくが、進捗状況を確認する指標としてより適切な方法があれば、今後ともご教示を願いたい。

【遠山産業経済部長】

- ・データ集の 14 ページに外国人宿泊者数が、参考として記載してあるとおりである。農家民泊などをご利用いただいたり、イギリスやフランスの研修を受け入れてきた経過もある。

【遠山産業経済部長】

- ・インバウンドについては、まだまだであると感じている。今回の AVIAMA 総会、世界フェスを契機に、インバウンドの受け皿づくりをしっかりと進めたいと取り組んできたが、全体の関係する皆さんまとめた受け皿づくりとまではいかなかったのは反省するところである。言語の対応では、観光公社を中心に指差しジェスチャーを徹底するなど積極的に関わっていかうとするなど動きは出てきている。観光公社でもインバウンドにしっかりと取り組んでいくこととしている。2020 年を視野に入れながら取り組んでいこうと思っている。

【三浦教育次長】

- ・学校の現状については別冊データ集 14 ページの全国学力・学習状況調査につ

【寺沢委員】

- ・食育について、将来ここを離れたとき、生まれ育った地域にどういうものがあったか、そこがとても大きいと感じる。
- ・市田柿についてこれだけ魅力あるものを、小さい時に体験することは大事だと思っている。農協で飯田市とも連携しながら市田柿GI など高付加価値戦略を行なっている。
- ・基本目標 1 にも関係する要望であるが、今年、高森町ではあるが、市田柿工房を増床してこの地域の市田柿の生柿生産と高付加価値戦略を行なっているが、12 億かけて広げる予定である。ここ、2、3 年で体験的な施設も並行して考えており、飯田下伊那地域の子どもたちの食育ということも含めて、そこで市田柿の生産、加工技術含めた体験的なことを考えている。是非そういう面で一緒に知恵を出していただけるとありがたい。都会に出て行っても、将来そういった経験を思い出し、U ターンなどで帰って来た時には役に立つと思っている。

【内山委員】

- ・食育インストラクターという資格を取得している。食文化は地域ごといろいろあると思う。まずはこの地域のこの季節にはこれを食べるなど、体験も大事だが、知るということも大事。それから先を見据えた体験など小学生から中学生また高校生へも波及していけたら良いのではないかな。

<基本目標 4 自然と歴史を守りいかし伝え、新たな文化をつくりだす>

いて記載している。これは、毎年 4 月に実施されているもの。

- ・このデータで「○」はほぼ全国平均、「◎」全国平均より高い、「△」は全国平均より低い。これが、飯田市の小中学生の状況である。
- ・中学にいったあとの伸び悩みが課題。また、長期欠席児童の問題がある。8,500 人ほどいるがその 1 % 程度のお子さんが何らかの理由で学校に行けない現状がある。

【三浦教育次長】

- ・今、飯田市で 19 校学校があるが、8 校ほどで一泊の農業体験を取り入れた取組をしている。実施していない学校については、夏休みなど一般公募をして農業宿泊体験や LG 飯田教育の中でも米づくりなどの体験をしている。まだまだ十分ではないかもしれないが、是非そういう施設ができれば、飯田市の子どもたちも使わせていただき学習できればと考える。

【櫻井社会教育担当参事】

- ・今年の夏は、人形劇世界フェス、AVIAMA 総会、それに加えシャルルヴィル・メジェール市友好都市 30 周年と国際色豊かな 10 日間であった。
- ・外国人関係者も多かった中で、「小さな世界都市への大きな第 1 歩」と市長も年頭所感で表明しているが、スタート地点に立ったと言える。イベントとす

【木田委員】

- ・人形劇フェスタは一般客として参加してみると、劇人のためのお祭りだと感じてしまう。そうではない人だととても疎外感を感じてしまう。
- ・戦略的にこの期間に来ると子どもらしいものが見られるとか、ここに行くともっと子どもが分かりやすい案内があるなど、そういう取り組みをしていくとやりやすいのではないと思う。知っている人でないと結構きびしい状況ではある。
- ・会場によっては、子どもより大人が前列にいたりするなどスタッフ側の運営に関して、悪い印象を与える原因となってしまう。
- ・人形劇を見るということをちゃんと伝える人がいたり、専門家がまちに必要であると感じる。人形劇のまちなのに、人形の作り方や人形劇の作り方を誰も知らない。それではなかなか根づかないと感じる。例えば、みんな市田柿が作れるとか、みんな水引が結べるとか、飛行機のことにはある程度詳しいとか、飯田だから飯田の人はみんな〇〇ができるということの一つに、人形劇のパペットをみんな一つは持っているなど、そういうちょっとした積み重ねが大事であると感じる。

【外松委員】

- ・言葉の使い方として、「地域振興の知の拠点」と「産業振興の知の拠点」とある。「知の拠点」というと、旧飯田工業高校跡地のことだと思っていたが、「地域振興の知の拠点」という言葉がでてきて、重複している感じでわかりづらい。
- ・この言葉の使い分けを考えた方が良いのではないか。

れば成功したと言える。

- ・基本目標 4 とすれば、そういった飯田の特徴的なものをいかして持続的にまちづくりを進め、伝統文化としていかしていくことが大きなねらいと言える。議会からも提言いただいている部分として、人形劇を観光的な側面とも連動するべきではないかのご意見をいただいている。40 年が終わり、次の 10 年に向けては、課題として捉え検討し取り組んでいく必要があると認識をしている。

【櫻井社会教育担当参事】

- ・劇人側のお祭りという感想があったが、エントリーの段階で劇団の皆さんのスケジュールに合わせ、各地区とのマッチングでプログラムは作らざるを得ないので、この期間は子ども向けなど、その観点では今まで捉えていなかった。できるだけ配慮として、この劇は子供向けであるとか大人向けであるなど対象者が分かるように表示をするようにしている。
- ・観光的な観点からいくと、宿泊場所は課題でもある。これは、すぐには解決できない問題だと認識している。
- ・以前、劇人の方は公民館宿泊がかなり多かった時代もある。時代や環境も変化する中で変わってきた。
- ・会場運営については、マニュアルがあり一番前に子ども、それから徐々に大人というようにはなっているが、本日いただいた意見を参考に、今年の総括はこれからなので活かしていきたいと考える。

【櫻井社会教育担当参事】

- ・議会の評価でも指摘をいただいている。そもそも、旧飯田工業高校跡地に「地域振興の知の拠点」を整備するにあたり、長野県との調整をする中で文化的な観点はそこには入れないということになり、棲み分けをするうえで便宜上このような表現をしている。言葉自体もわかりづらく適切ではないと指摘をいただいている。来年度に向けて見直しをしていく。

＜基本目標5 若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる＞

【下平委員】

- ・結婚は個人の意志が尊重されるため、この分野の取組みはとても難しい。時代の流れもあると思うが、最近は結婚観を語ることもささ躊躇するようになった。
- ・こうした状況はあるものの、先人の人生経験を後世に伝えることは大事なことであり、例えば二世帯、三世帯家族で暮らしてきた、お爺さんやお婆さんから自身の子育て体験談を話してもらおうとか、誰かが声を挙げていかなければいけないと思う。

【佐々木委員】

- ・過去にいろんな婚活イベントを見てきたが、そこから感じたことは、進行役の「場づくり」が重要であるということ。イベントの構成と雰囲気づくりによって結果が左右されるのではないかと思う。
- ・世間でいわれているファシリテーター能力は、婚活イベントに相応しいリラックスしたムードづくりや盛り上げるなどのサポート技術が必要になるため、今後指導や育成が必要だと思う。

【下平委員】

- ・男女の集いの場を活用し、浴衣で参加するなど雰囲気づくりに工夫をしてみてもいい。

【松村委員】

- ・基本目標に掲げた「若い世代の～希望をかなえる」は、単に数を増やすことではなく、若い世代の暮らしの希望をかなえることが重要。そういった意味では、これまでも問題視されてきたが、保育所への入所に関する課題として、「希望する場所に入所できない」、「希望する時期に入所できない」などの状況がある。近年の核家族化や共働き世帯の増加により、職場に近い保育所を希望する保護者が増えており、入所希望者が一定箇所に集中している。さらに中途入所は難しくなるため。受け入れ側から年度当初の入所を勧められ、入れないと困るので職を探すとといったことが起きており、国が推進している育休制度をはじめとする労働条件の整備とのギャップが生じている。

【林委員】

- ・マッチングしていないのであれば、ニーズ調査で現状を把握し、その予測に基づき施設を整備していくことが必要なのではないのか。

【清水健康副支部長】

- ・子育て分野における取組については、これまで市としても保育園や出産を取り巻く医療環境の整備など様々な支援をし、また今後もやれる事があると思うが、結婚に対する施策は難しい面もあり、手探りの状態である。
- ・未来デザイン 2028 では、こうした課題に対して、多様な主体と連携し対応していくもの、本日は質問に留まらず、アイデアや提案をいただけるとありがたい。

【松村委員】

- ・ニーズ調査は既にやっているが、今は昔と違って保育所を選べるようになったため、個々の希望を把握しきれない。市内全体のキャパはある。

【下平委員】

- ・当地域としては、いわゆる待機児童はいないが、保護者の希望に寄り添えていないということになる。

【三浦委員】

- ・評価指標に「未満児保育の提供数」とあり、数値目標を掲げているが、生まれてくる子どもが少なくなっている状況下で、基準値より数値が高くなればいいのか疑問に思う。
- ・地域課題と向き合って、“未満児保育の希望に添えているのか”を指標にするほうが望ましいのではないか。

【松村委員】

- ・保育施設ごとに偏りがあるのが問題、どう調整するかの方策が大変難しいが必要となる。
- ・兄弟が別々の場所になってしまう現状もあり、抜本的な解決方法の検討が必要となる。

<基本目標6 「市民総健康」と「生涯現役」をめざす>

【大沢委員】

- ・健康増進策は絶対にやっていかなければいけない取組であるが、介護認定率を下げることはそんなに簡単なことではなく、多少遅らせることは可能だが、最期はどうしたって介護が必要になる。ここは見逃してはいけない深刻な問題だと思うが、これまでに、具体的な取組がほとんど出ていない。
- ・介護職の求人についても、広告が毎日のように出ているが、現実的には希望する人がいないといった現状がある。今後 2025 年に高齢化がピークを迎えることを踏まえると、この問題への対応が盛り込まれないことは明らかにおかしい。
- ・移住定住策で人口増を掲げるということは、将来、最終的に必要となる「介護」

【清水健康福祉部長】

- ・南信州広域連合在宅医療介護連携協議会専門部会のワーキンググループで、看護職と同様に介護職の人材確保に向けた取組が行われているところであるが、全国的な問題でもあり追いつかない状況である。深刻な課題として取り組まなければいけない。

そのものをもっと真剣に考えなければいけないと思う。

【下平委員】

- ・介護する皆さんが高齢化しており、高齢者同士の介護といったところが実態では。昔は見舞金を出していたこともあるが、そういった手当を出す検討も必要ではないか。

【大沢委員】

- ・介護に縛り付けるようことになってしまい、今の働き方改革とは相反するのではないか。飯田市社会福祉協議会でも常勤職員約 270 名のうち 10%が 60 歳以上となっている。

【三浦委員】

- ・飯田女子短大も全国的な傾向と同様で学生は少なくなっている。若い世代の介護離れが進んでおり、定員の約半分が社会人となっている。今後における学生確保の見込みについては、介護に対する若い人たちの「きつい」、「きたない」などのマイナスイメージを払拭していかないと厳しい状況にある。
- ・こうした状況もあるが、毎年中学校や高校に出向き、仕事体験を通して「介護職」が素敵な職業であることを PR しており、飯田 OIDE 長姫高校については、文化祭のブースにも参加している。

【大沢委員】

- ・社協にもこうした PR 活動の影響を受けて就職したケースがあるが、飯田市産業経済部で実施している“地元高校生を対象とした地域産業説明会”で介護職に影響を受けて選んできた人がいる。成果が明確に出ていると感心した。

<基本目標 7 共に支え合い、自ら行動する地域福祉を充実させる>

【大沢委員】

- ・福祉の要素が関連する基本目標 8 「新時代に向けたこれからの地域経営の仕組みをつくる」と一緒に考えることが必要である。

＜基本目標 8 新時代に向けたこれからの地域経営の仕組みをつくる＞

【藤本委員】

- ・ 昨年から飯田市は地域ごとのふるさと納税をスタートし、地域が工夫してふるさと納税をもらえるように努力しなさいと言われていた。ただ、周りの若い人に聞いてみると、食べ物で魅力があればふるさと納税してもいいと思うが、例えば地区の夏祭りのチケットがあったとしてふるさと納税するかといわれれば、しない。私の住む橋北地区では特に食べ物を生産していないので、工夫しろと言われても難しい。何か皆さんのご意見があればいただきたい。

【小林委員】

- ・ 本来ふるさと納税はその地域に頑張ってもらいたいという純粋な気持ちで応援するもの。いただいた寄附でどれくらい成果があったかというのを報告していくべきだと思う。

【森下委員】

- ・ 他の町村の方とお話をしたときに、ある村ではふるさと納税のお返しがとても高額だという話を聞き、ふるさと納税をいただいたらそんなに高額なお返しをしなければいけないのかとびっくりした。

【藤本委員】

- ・ 飯田市では腕時計の取り扱いをやめたことで、寄附額が半減したと聞いているが。

【本田委員】

- ・ 明確な用途を打ち出して県外の人とストーリーを共有するという考えは、実に飯田市らしい新しい時代にふさわしい考えであると思う。一方で、手段を問わずまずお金をいただかなければ始まらないという考え方もある。高額な返礼品

【松下市民協働環境部長】

- ・ クラウドファンディングという、プロジェクトに対して出資者を募る仕組みがある。直近で言えば、南信濃で空き家を改修して若者の交流拠点・シェアハウスとするというプロジェクトに地域の若者が取り組み、目標額を決めて募ったところ、実際に数百万円というお金が集まった。このふるさと納税（20 地区応援隊）の仕組みのイメージはそれ。
- ・ 「こういう地区です」「こういう魅力があります」といったことを発信していただくとなかなか寄付はいただけないと思う。やることを絞り込んで明確に打ち出していくと、返礼がないとしても応援してくれる人はいると思う。そういう意味では、20 地区応援隊の仕組みははまだそこまでになりきれていないので、地区の皆さんと一緒に考えて、人を引き付けるような仕組みとしていきたい。

【松下市民協働環境部長】

- ・ 全国で返礼合戦がエスカレートしてしまったので、総務省から通知が出て、高額な返礼品はやめましょうということになった。高額な返礼品で引き付けていたような市町村については大きく寄附額が減ったところもある。

を出すというのも一つの考え方だと思うが、飯田市はそれを選ばなかった。では今後どうしていくか。

- ・話は変わるが、まちづくり委員会に変わってから 10 年経つ。当初聞いていたのは、各地域においてその個性と知恵を絞って、それぞれのお金をそれぞれの地域で有効に使ってほしいということであったと思うが、10 年たっても旧来の仕事に追われていて、「地域らしさ」にどのくらいお金が使われているかなと疑問に思うところがある。地域の「経営」、自分たちで自立して運営していくということを考えると、見直していく必要があるのでは。

【藤本委員】

- ・地域の特色を出していくというのが本来の姿であると思うが、それ以上に市の方からあれをやれ、これをやれというのが来てしまい、時間がない。さらに役員の成り手がいない。そういう部分は問題だと思う。

【小林委員】

- ・ほとんどの人は当事者意識が薄い。一部の人が交代でぐるぐると引き受けている感じ。10 年も経てばその人たちが年をとり、その次の世代をと思うとなかなかいない。地区によっても違う。人口の多い地区では一度引き受ければ次に回ってくるのは何年後という感じだが、人口の少ないところでは一人で何役も引き受けなければいけない。

【森下委員】

- ・まちづくり委員会になる前は公民館が主体となっていたいろんな事業ができていた。まちづくり委員会ができてからは公民館もまちづくり委員会の中に組み込まれたので、独立してやることができない。私自身、公民館では小中学生や高校生と一緒に地域のことを知る活動や交流を続けてきた。今も面白く活動できているが、以前の方がもっと主体的にできていた。

【藤本委員】

- ・地区では空き家が増えて、シャッターが閉じられた商店街になっている。今後を考えたとき、お店が閉店したからまた新しいお店をとというのは不可能だと思う。例えば、点在する空き家・店舗を利用して工場の生産ラインを組んでもらうとか、既成概念を外して、発想を変えることが必要だと思うが、何かいいアイデアはないか。

【松下市民協働環境部長】

- ・従来の自治会の機能は市に対して施設整備などの要望を挙げていくというのが主で、藤本委員が言われたような、空き家を地域としてどう利活用していくかというようなことはあまり自治会の中心的な取り組みではなかった。
- ・そうした取り組みはこの 10 年間で間違いなく起きてきていて、例えば山本では杵原応援団という特別な組織を作って、ピーク時にはバスが 400 台来るといった状況を作った、とか、千代ではよこね田んぼのお米をつかったお酒を作

ってそれを販売していく方法を地域で考えている。そういう意味では、全地区ではないがそういう動きが出つつあり、今はまさに過渡期である。そういう動きを我々もしっかりと支援していきたい。

<基本目標9 個性を尊重し、多様な価値観を認め合いながら、交流する>

【藤本委員】

- ・LGBTについてどんな考えでいるか。

【本田委員】

- ・国際交流推進協会として社会的マイノリティについて勉強しているが、まず「違って当たり前」と思わないといけない。今は「これが普通だ」という言い方は通用しない。
- ・企業の戦略としては、いろんな個性を持っている人がいて、そういう人たちを平等に社会的な地位にあげて一緒に働きましょと。それがダイバーシティ。我々もそれに追いつかないといけない。なかなか難しいと思うが、だいぶ浸透しつつあると思う。

【藤本委員】

- ・人口減少の歯止めという面からみると相反していってしまうように思える。

【本田委員】

- ・それはコメントが難しい問題である。
- ・今、サブカルチャーとって、飯田でも丘の上でフェスティバルが開催されているが、その人たちからすると「俺たちをサブカルチャーと呼ぶな」と。
- ・あのイベントも一生懸命やってきて、だんだん大きくなってきた。来てくれた人に聞くと、飯田市ほどのびのびやらせてくれる所はなくて、飯田はメッカになれるそう。当日のツイッターでは日本中の話題の中でベストテンに入る。
- ・つまりこれは何がメインで何がサブかという話。私も始めたころは偏見で見ていた部分もあったが、それは大きな間違い。
- ・マイノリティというものに対して、例えば外国人に対して、飯田は日本で一番外国人に優しい町だといえれば世界中から人が来る。

【本田委員】

- ・我々は自分で満足してしまう。外の人に評価してもらう必要はあると思う。

【本田委員】

- ・まだまだだと思う。世界都市を目指すのであればもう少し種をまいておく必要はある。

【藤本委員】

- ・飯田市への外国人の居住数は。

【小林委員】

- ・それはこちらが歩み寄るといことか、それともその逆か。

【本田委員】

- ・郷に入っては郷に従えという言葉もあるが、そうではなくお互いに理解が必要。

【小林委員】

- ・個人的には外国人との共存というのはあまり歓迎はしない。だからどこまで譲るかというのは非常に気になる。

【本田委員】

- ・お互いのアイデンティティを共有するというのは難しい部分がある。ただ、お互いに「飯田に住む」というところで歩み寄りが必要。お互いの国のことや文化とかについて「こちら側に来てください」というのは難しい。

【小林委員】

- ・彼らはお客様であるのか、それとも同じ地域に住む住民なのか。

【本田委員】

- ・地球市民という言葉があるように、同じ人間として大きく見ていただけるので

【北沢リニア推進部長】

- ・サブカルとかそういうものが比較的受け入れられている地域だという話だったが、市民意識調査の中で「個性を尊重し、多様な価値観を認め合いながら交流する」が充実していると思う割合が 40%だが、これは地方都市としては高いといえるのか、そのあたりはどうなんでしょうか。

【北沢リニア推進部長】

- 地域コミュニティの中で外から来た人を受け入れやすい地域としていえるのかどうなのか。

【松下市民協働環境部長】

- ・大体 2%、2000 人くらい。リニア時代に向けた課題として、隣に住んでいる外国人とうまくコミュニケーションがとれずすれ違いが生じてそれが潜在的に地域の課題となっているところが結構ある。お互いの価値観を理解したり共有したりということからするとまだまだ。

あれば、同じ飯田に住む人間ということで飯田人といえるのではないか。

【藤本委員】

- ・建設関係の仕事をしているが、外国人を雇用する場合には登録しなさいという制度がある。そういう偏見はある。

【森下委員】

- ・国際交流の夕べというイベントがあつて、私も環境の関係で参加しているが、外国人の方がいらっしゃって、わからないことは聞いて行ってくれたりして、とてもいいと思う。

<基本目標 11 災害に備え、社会基盤を強化し、防災意識を高める>

【松村委員】

- ・子育て中の若い世代が、自分が住んでいる地域の危険個所を認識していない。せつかくあるハザードマップなども見ておらず、世間に広まっていない。
- ・乳幼児学級の際にもハザードマップを見る時間を設けているが、一時避難場所すらわかっていない。マップ上には記載されているが、意味が分かっていない。こうした現状を受け止めて、もっと広めていくには、どんな方法があるのか考えなければいけない。

【下平委員】

- ・限られたキャパシティを踏まえると「自助」・「共助」・「公助」に「近助」の概念を加えたらどうか。ひと昔前なら買い物や病院に行く時にも隣近所へ伝えていくことが普通に行われていたが、災害時にはこうした事がかなり役立つのではないか。
- ・消防団の人員確保も大きな課題だと思う。

【松村委員】

- ・組合加入と同じで若い人達が消防団にメリットを感じられない。集会や飲み会が多く、子育て世代のお母さんには苦痛で極力入らないでほしいといった話が拡散している。

【松下市民協働環境部長】

- ・例えばゴミ出しのことについて、その人が知らないことによって結果的にすごく環境を悪くしてしまつて、それによって住民との関係が難しくなるということはある。そこで間に入って説明をするという機能があればそこまでにならないことはある。そういう意味で公的であったり民間の皆さんだったり間に入ってつなげていくということは必要。

【北沢危機管理室副参事】

- ・年に 2 回実施する防災訓練での周知が基本となるが、今年度は、天竜川の 100 年及び 1000 年に一度の浸水想定が示されたため、今後、地域に説明に向かう予定である。こうした機会も活用したいと考えるが、地域のコミュニティ・コミュニケーションが大事である。

- ・年配者が良さや必要性をうまく伝えることができないことが原因のひとつではあるが、地域コミュニティの重要性をうまく伝える方法など何か良いアイデアがあればいいのだが。

【下平委員】

- ・重機免許取得など仕事につながるメリットがあればいいのではないか。

【松村委員】

- ・防災無線の竜巻情報で、「強固な建物に隠れろ」と放送されるが、具体的にどの建物を指しているのかがよくわからないといった声を耳にする。飯田でも起こる可能性があるのか。

【鈴木委員】

- ・ハザードマップはあるものの、紙面では現実をイメージしにくい。例えば、飯田独自の映像を作成してケーブルテレビで流すとか、子ども向けの映像を CD や DVD で作成し、家族で見ってもらうよう各家庭へ配布するなど、啓発方法にも工夫がいるのではないか。

【北沢危機管理副参事】

- ・記録が不鮮明ではあるが、過去に発生したことはある。竜巻に関する情報は、現状乏しいため、放送自体に具体性がないかもしれないが、放送を聞いて注意を払うことが大事である。

<基本目標 12 リニア時代を支える都市基盤を整備する>

【本田委員】

- ・飯田も差別化が必要で、外部の人たちが地域デザインをどう評価しているかは常に検証していかなければいけない。これから 10 年間の間に県外の人が飯田に何を求めているかという意見を聞くべきだと思う。
- ・商売においては差別化が最も重要。経営という意味では、飯田市は日本全体から見てこういう町だという差別化ができることによって自立していける。
- ・10 年後にリニアという大チャンスがあるのだから、このチャンスに飯田に来る「必然」を作らなければならない。必然というのは「あれがあるから飯田に来る」ということ。いいところはいっぱいあるが、都会の人がそれを飯田のブランドとして評価しているかというのを反省すべきである。
- ・未来デザインの戦略計画を見たときに、「今後を見据えたときの課題」とあるが、これを各部署が反省、ウィークポイントとして受け止めているかをしっかり考えていかないと、いつまでたってもぬるま湯の戦略になってしまう。
- ・全ての戦略を 100% やっていくよりは、何か一つの重点目標に対してやってい

く、例えば松本市の「健康寿命延伸都市」のようにわかりやすい差別化がないといけないと思う。飯田のキャッチフレーズもいいと思うが、10年後の飯田の差別的な戦略が見えてこない。それを早く作らないといけない。

【森下委員】

- ・私が住む上郷では移転の話や工事の話が着々と進んでいる空気があるが、やはり飯田へ来る目的を持ってきてほしいし、駅を降りたら何もなかったということにはなあってほしくない。中心部に行ったらすごい商業施設があって面白かったという風になってほしい。
- ・何年も前に新潟へ視察に行ったとき、商業施設が閉店し、その施設の中に銀行や子供の遊び場所があり会議もできる施設を見てきて、飯田にも中心部にこんな施設ができればいいなという話をした。
- ・今、丘の上では昼間からシャッターが下りていて悲しい。何か活性化ができないかなと思う。箱モノを建てればいいというわけではないが、何かできればいいなと思う。
- ・中心市街地の若い方が、「自分たちも、個々で店舗をやるのではなくそういう施設の中に集まって営業すればお客さんも来てくれるのではという話をしたことがあるが、年配の方がダメだと言って終わってしまった。」と話してくれた。若い人の意見も取り入れていかないと、ますます寂れていってしまうと思う。

【本田委員】

- ・東海道新幹線の代替え、リスクオフということでリニアがつくられるということであるが、企業が飯田市に情報センターとかセミナーハウスを作ることが考えられるとするならば、しっかりプレゼンテーションをやって、企業の人が地震に備えて飯田市に機能の一部を移動しておこうかなという魅力を感じるようにすること。
- ・そういったプレゼンテーションを、積極的に腹をくくってやっていく。こういう土地がありますよとか税制優遇がありますよということを謳っていかないと絵に描いた餅になってしまう。企業の方から声をかけてくれるのを待ってはいけない。
- ・企業の側からすれば、リスクオフということであれば大都市にいる必要はない。その代替地として飯田市は、流通の拠点みたいなものをこの辺に作れば、将来的に三遠南信道が開いたときに充分ハブ的な地域になれると思う。そういうのを市として腹をくくってやらないといけない。

【北沢リニア推進部長】

- ・中心市街地は飯田の中心地として位置づけをとという考えはもちろんあるし、それに加えて、広域交通拠点としてリニア駅ができる。
- ・駅ができれば人が増えるということはありませんので、飯田に来てもらう理由を作っていかなければいけない。それは産業であり観光であったりすると思うが、駅はその発信ができる場所。
- ・中心市街地においても様々な課題はあるが、拠点としての考え方を再整理しながら拠点が連携できる体制を作っていく。リニア駅もしっかり魅力のある場所としていく。
- ・リニア駅は、交通の乗り換え機能としては世界からも評価されるような機能を確保しなければいけないが、同時に、地域の皆さんも交流、集えるという目的を持ってもらえるような場所にしたいと考えている。
- ・リニア駅周辺の整備も様々に検討しているが、中心市街地の開発の方向も合わせて考え方を整理していかなければいけない。

【小林委員】

- ・駅のデザインは、今ワークショップをやっていると思うが、最終的にその形が決まった時点でプレゼンができるということなのか、それとも駅だけでなくまち全体の青写真を作り上げたうえで発信する形になるのか。

【小林委員】

- ・あれを見ていると何でもかんでも駅へ詰め込む感じになっている。私は先ほど本田委員が言われたように、交通のハブにするのが一番いいと思う。航空関係のハブというのは全世界中にくさびのようにつながることができるが、飯田は土地的に弱い部分がある。だけどあの駅に観光バスのターミナルをつくるというのはそれなりにできると思う。

【藤本委員】

- ・この前駒ヶ根の人と話をする機会があったが、駒ヶ根市ではリニア駅までシャトルバスを一日何本も出して、観光客を持っていこうとしているようだ。

【藤本委員】

- ・在来線の乗換駅はどう考えているか。

<全体を通して>

【大沢委員ほか】

- ・未来デザイン会議は、年に何回予定しているのか。せっかくだいい議論ができたので、今回だけではもったいない。分科会でコンタクトをとりあって、次回につなげてみてはいかかがか。

【北沢リニア推進部長】

- ・交通機能とかそういうものは技術的に一定のものが必要だと思うので、ワークショップで検討いただいている部分はどちらかというところと広場の使い方とか高架下の使い方。

【北沢リニア推進部長】

- ・トランジットハブとしてしっかりしたものを作るというのは第一義的な定義。それに加えて、交流・集いというテーマを兼ね備えて両立させていきたい。
- ・そもそもリニアというのは新幹線の新たな路線として位置付けるというところからスタートしているということから、今おっしゃっていただいたように企業のリスクコンサルというのは大きな課題であって、それに応えられる構想にしていかなければいけない。

【北沢リニア推進部長】

- ・駒ヶ根、伊那谷全体で観光と合わせて二次交通をどうするかということを考えている。飯田だけでなく昼神もある、南アルプスもあるという中で、二次交通を串刺しの串だとすると、団子、つまり要素自体を作っていくことも必要。

【北沢リニア推進部長】

- ・乗換駅については、なるべくリニア駅に近い場所ということで提案をしていくが、JRの営業方針からすると、請願駅として駅の設置を認めるということであれば、技術的なことと採算性の部分でJRが判断していくこととなる。そのためには、観光要素とか、広域的な施設をこういう目的でこういう場所に作ろうとしているとか、コンベンションとかそういうものを含めて、乗換駅自体の駅利用をしっかり説明できるようにしていかなないと、採算面でJRへの理解というものが得られない。地形的、技術的なものも合わせて、採算性についてもしっかり説明ができるような要求をしなければいけない。